京都支部

2013 年度支部活動報告

1. ＜2013.04.13　総会講演要旨＞
2. ＜2013.05.30　第１回例会講演要旨＞
3. ＜2013.09.28　第２回例会講演要旨＞
4. ＜2013.11.26　第３回例会講演要旨＞
5. ＜2014.01.25　京都支部新年会＞
6. ＜2014.03.15　第４回例会講演要旨＞

1.　2013年度京都支部総会報告と講演要旨

「中東女性の社会進出への課題―フィールドワークから」

講師：中西久枝 会員　　2013年４月１３日

支部総会（出席者21名、委任状12名で成立）では、最初に、任期満了に伴う支部長選出について、現支部長中川慶子さんの再任が承認された。これは、昨年11月に支部長推薦委員会（支部長経験者および現役員の合計12名が出席）が開かれ、全員一致で現支部長の再任を推薦したことによるものである。役員9名については、新支部長から、都合で辞任する1名以外は、全員留任する旨の報告があった。この体制で向2年間、支部活動を継続・発展させたいので、会員の皆さんのご支援をよろしくとの挨拶があった。その後、昨年度の事業報告、会計報告、監査報告並びに今年度の事業計画、会計予算が承認された。各担当から報告があった。昨年と同様に、『2012年度京部支部活動報告』が作成された旨が報告された。

昼食を挟み、会員の同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の中西久枝教授から「中東女性の社会進出への課題 ― フィールドワークから」と題する講演をお聞きした。中西先生は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）大学院歴史学研究科で中東問題についての論文でPh.Dをお取りになり、2001年名古屋大学大学院国際開発研究科教授（名古屋大学初の女性部局長）を経て、2010年から現職。専門は中東の現代政治、イスラームとジェンダーなど。著書は『イスラームとヴェール』など多数。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「一般に、中東における女性の社会進出は、他の地域に比べてあまり進んでいないというイメージがある。事実、人間開発指数について他の地域と比較すると、最も低いのがサブ・サハラアフリカ、次に南アジアであり、アラブ諸国は下から３番目となっている。他方、中東の女性については、ヴェール着用の習慣や義務などが社会進出の壁になっているのではないかという固定観念がある。しかしながら、ヴェールの持つ政治的、経済的、社会的、文化的意義は多様であり、中東の女性はヴェールゆえに社会進出に対し内向きであるとばかりは言えない。中東の女性の法的、政治的、経済的、社会的地位は、アラブと非アラブ（イラン、トルコ、アフガニスタン、パキスタンなど）の違い、産油国か非産油国か、部族社会的な習慣がどこまで残っているかなど、さまざまな要因によって異なり、一般化することはできない。

それをあえて一般化すれば、女性のライフサイクルが欧米や日本とは伝統的に異なる点が指摘できる。伝統的には、１８歳くらいまでには結婚し、その後出産となり、高等教育を受けることは二の次であった。しかし、特に都市部、産油国などでは、結婚年齢は上昇しており、２０代の結婚が多くなっている。大学に進学する女性の率も増えており、以前は結婚してから大学に行く女性もいたが、現在は、欧米や日本のように、大学卒業後就職し、結婚、出産というパターンもよく見られる。

家族生活における女性の地位について言えば、女性の家庭での発言権は強いが、社会的には女性は守られるべき性であるという考え方が強く、これはイスラーム以前の部族社会の名残りである。女性のヴェールは、イスラーム以前から地中海地域で高貴な身分を示すステータスシンボルとして着用する習慣があったが、それがイスラームの誕生とともに、イスラーム独特の伝統のように捉えられるようになった。保護される性としての女性は、伝統的には、結婚する前は父親や男兄弟、結婚後は夫に従うことが期待されている。

イスラーム世界では、見知らぬ男性との婚前交渉が社会的に許容されておらず、結婚する前は、女性ひとりで見知らぬ男性と接触することはなるべく避ける傾向にあり、男性と女性の空間をしきるものとして、ヴェールが着用されている。この「しきり」が、アラビア語のパルダーという用語に当たり、パルダーは「カーテン」の意味である。つまり、ヴェールとはカーテンでしきりをつくるという意味になる。コーランには、ヴェールをかぶらなくてもよい人間関係とそうでない関係が明記されている。ヴェールをかぶらなくてもよい人間関係は「マフラム」というアラビア語の概念で示され、父親、兄弟、夫、夫の子ども、老人、子ども、女性 であり、逆にマフラムでない関係の相手の前ではヴェールをかぶるのがよいとされている。ヴェールの着用は、義務付けられている国と本人の自由意

思に任されている国とがあり、前者には、サウディアラビア、イランなどがあり、後者にはエジプト、トルコ、ヨルダンなどが入るが、後者の場合でも、ヴェールを着用する女性は増えている。

公共の空間では、バス、モスク、電車などが男性専用と女性専用とに分けられていることがイスラーム世界ではよく見られるが、実際には、すべての空間がすでにしきられているわけではないので、女性はヴェールをかぶることによって、この「しきり」を設け、見知らぬ男性の視線から解放されるによう振る舞うという面がある。他方、ヴェールの考え方が破られるケースもあり、混んだ乗り合いタクシーに乗り込む時、見知らぬ男性と肌が触れることはあるが、これはしかたがないと考えられているようである。また、サウディアラビアでは、外国人の女性は、体の線の出ないコート風の上着をまとっていれば、頭にスカーフなどはする必要がないとされている国家もある。一方、イランではたとえ外国人であってもヴェールは着用しなければならない国もある。

ヴェールには、チャドルのように一枚布で全身を覆うものから、レインコート風のコートにスカーフをかぶることで、体の線と髪が出ないことが確保されれば、その形態やコートの長さなどが自由である場合など、多様である。また、トルコやイランのように、ヴェールがファッション化している国家もあるが、ヴェールは一般には都市部での現象であり、非都市部に行くと簡易になる場合もある、他方、沙漠に住む人々は、砂よけや日よけのためにヴェールをかぶるという習慣もあり、体を覆うほどよい場合がある。

自らの意思でヴェールを着用する女性は中東でも欧米でも多い。ヴェールは、自分がイスラーム教徒の敬虔な女性であることの自己証明であったり、ヴェールによっては特定の政治・社会集団に属することを示すことであったり、公共交通機関でのセクハラの防止であったりと、着用することが著す意味は多義的である。

このようにヴェールには多様な意味が表現されているが、着用すること自体が女性の場は家庭に一義的にあるという保守的な社会もあり、そうした社会は概して部族単位で政治、経済、社会活動が営まれている地域である。そうした地域には、中東と言ってよいかどうかわからないが、パキスタンやアフガニスタン、バングラデシュなどの南アジアの国家や、スーダンイエメンなどの国家が入る。

他方、イランのように、１９７９年のイスラーム革命後、着用が義務化され、それによってむしろ自分の娘を安心して大学や職場に送り出せると考えられるようになり、女性の大学や大学院進学がさかんになったケースもある。イランでは、イスラーム化政策のために女性の専門職が増えたことにより、女性の就労の機会が革命後増えている。

また、サウディアラビア、アラブ首長国連邦、カタールなどの石油、天然ガスなどの資源国では、一般に人口に占める外国人の割合が７割以上あり、労働人口の「現地人化」政策が急務となっている。そうした国家では、大学進学率がむしろ男性より高い女性を高度な技術、学力をもった人材として採用する政策に転換しており、特に女性の公的部門における就労率は年々増加している。これらの国々では、女性のキャリアウーマンも徐々に増えており、母親や女姉妹の助けを得ながら、子育てをしながら、大学院に入りなおしてキャリアアップをしていく女性たちも見られる。

中東の人々は、男性も女性も中東域内及び中東域外への移住をすることに対し抵抗感があまりないため、よりよい就労の機会があれば外国に移住したり、出稼ぎに行ったりすることも多い。夫の仕事の都合で一緒に移住し、そこで自分のキャリアも磨いたり、ＮＧＯなどの社会的活動に従事したりする女性も多く、中東の中間層及び上層部の女性のモビリティは、一般に日本人女性よりはるかに高い。

中東の女性の社会進出についての課題は、大きく分けて３つある。第一に、イスラーム法と呼ばれるイスラーム法体系に根差した法が特に民法の分野に根強く残っており、男女平等になっていない法制度をいかに是正することができるかである。「アラブの春」以降、ムスリム同胞団というイスラーム組織の後押しで成立したエジプトでは、新憲法が制定されたが、保守的なイスラーム法学者の法解釈が以前よりも強く反映されるようになり、女性に関わる法的権利はむしろ縮小した。第二に、アフガニスタンやイエメンのように、いまだに部族社会の伝統が根強い社会では、女性が男性と同じように教育を受けることに抵抗を示す保守層が多く存在する国家がある。そうした社会では、社会通念や価値観や社会規範の中に、ジェンダー平等的な考え方を拡大していく必要がある。第三に、市場経済化が進展する中東の資源国においては、民間セクターでの現地人化が特に急務となっているが、産休、育休などの制度が公的部門の方が整備されているため、女性が民間セクター に労働力として進出していかない傾向がある。女性の高度人材をいかに活用していくべきか、女性の就労をより促進するような社会制度の構築が求められている。」（以上、中西教授による講演要約）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

講演では、イスラームの女性のかぶるヴェールを取り上げ、アラブ社会の中でヴェールがどのような役割を果たしているかを、歴史的、文化的、社会的な観点から、また国によっても、民族によっても異なるあり方を、広範囲に、具体的な例をあげながら明確にお話してくださった。質問のなかのいくつかを取り上げる。

①まず、なぜ特にイランを中心に研究をなさっているのかという質問には、中学生のときに「石油ショック」を経験し、中東地域に強烈に関心をもった。その後大学時代に「イラン革命」が起こり、西アジアを専攻することを決めた。それ以来この道をひたすら走っている。語学はまずペルシャ語とウイグル語を、さらに英語、フランス語を勉強し、中東研究に備えた。世界のエネルギーにとって中東の存在が今後の社会にどういう影響を与えるかということに関心をもっている、というお返事だった。

②ヴェールは今後どうなると思うか、という質問に対しては、イラン、サウディアラビアでは国の法律で、かぶることが義務付けられている。イランの場合で言うと、情勢が変われば、イランの女性はかなり脱ぐと思うが、自分の意思でかぶっている人はなかなか脱がない。それは宗教上の理由の場合もあるし、ヴェールをかぶり、カーテンとして自分を囲むことで、大学、仕事に進出できるし、セクハラを受けない利点もある。そういう人は常に一定数存在する。また、それぞれの国で民法が改正され、イスラーム法という法体系がどれだけ、影響力をなくしていくかにもよる。又教育の問題もある。例えばサウディアラビアのような都市型(人口の80%が都市に住む)の国の場合は、この10年間女性は男性より高学歴である。イランでは大学教員の半分は女性である。その様なところでは、ヴェールは形骸化している、とのことである。

③一夫多妻は現在どうなっているのか、との質問に対しては、中東女性のライフサイクルは、イスラームの教えで、次の世代を生み、育てるというところにある。中東では子供を作ることは社会的な行為である。しかし現在、一夫多妻を法律上禁止している国はトルコとチュニジアしかない。そこはイスラーム法の影響を受けない世俗法に変わった。それ以外の国ではまだイスラーム法の影響が残っている。しかし現実には、一夫多妻が残っている階層は、2つに極端に分かれる。一方は、非常な富裕層（持参金に1 kgの金塊を用意するようなサウディアラビア、クゥエートの大金持ち）、他方は、パキスタンやアフガニスタンのように、紛争が続き、戦死者が多く、死んだお兄さんか弟のお嫁さんの面倒を見る必要のある階層である、とのお答えだった。

④中東の女性に関する質問だけではなく、中東の最近の政治動向にかかわる質問もあった。「アラブの春」以来、中東では民主化が進んだのか、シリア問題はどうなるのだろうか、との質問に対して、シリアのアサド政権を支えているのがロシア。それが続く限り、アサド政権は落ちない。リビアの場合は、200名くらいしか死んでいない時に、人道的支援という名目で欧米軍がリビアのカダフィ政権を崩壊させた。他方で、何10万という人間を殺しているアサド政権には、欧米軍は出て行かない。その理由は、イスラエルは第3次中東戦争でシリアからゴラン高原をうばった。しかしシリアはイスラエルと紳士協定を結び、イスラエルを攻撃しない。したがってイスラエルを支援しているアメリカ軍はシリ

アを攻撃しない。イスラエルとイランは敵対関係。アメリカとイランは敵対している。この関係の中で、アメリカの中東における覇権をきらうロシアと、反米であるイランがアサド政権を支援している。中国もイランに近く、イランから石油を買っている。さまざまな問題が複雑に入り乱れて、まるでシリアはパンドラの箱のようで、だから誰も手をつけない。従ってシリア問題は長引くと思う、というご意見だった。

最後に、先生に今後はどのような問題を扱おうと思っていらっしゃるか、お聞きしたところ、たくさんあるが、①イスラーム法のなかの家族に関する民法規定が、民主化の波の影響でどう変わっていくかを研究したい。イラン、トルコ、エジプトの憲法改正が、民法にどう影響し、変わっていくか、それが女性の権利にどう響くかを、比較研究したい。②安全保障問題で、グローバル経済が中東の、特に非産油国にどのような影響をあたえていくかを研究したい。③フィールドワークとして女性が中心になっているNGOを研究してきたが、それらが草の根の市民社会運動をどのように展開していくのか、たとえばレバノンで はもう欧米からの資金援助はいらないというほどである。そこに焦点を合わせた調査をしていきたい、ということだった。

中東情勢は、イスラエル、エジプトは言うに及ばず、シリア問題、イラン問題など、現在まるで一触即発の火薬庫のような状態にあり、その周囲には、欧米、ロシア、中国の思惑が複雑に絡み合っている複雑さである。それらをどう理解していいか分からないと思っていた人も、中西先生の長年の調査研究に基づいた具体的で明晰な説明で、少しは分かった気になったのではないだろうか。

そのような情勢の中で年に２、3回は中東に赴いて、フィールドワークをしていらっしゃる先生には本当に頭がさがる思いである。ヴェールに象徴されるように男女が隔絶したイスラーム社会において女性の問題を調査する上では、女性研究者であることは絶対的な強みだと思われる。どうぞ今後も実りのある研究をお続けになって、私たちをまた啓発していただきたいと思いながら、会を終えた。

2.　第1回例会講演要旨　「ミャンマー民主化とアウンサンスーチー」

講師：大津典子元同志社大学非常勤講師　　2013年５月３０日

大津典子（のりこ）さんは、同志社大学英文科卒業、京都大学大学院文学研究科仏教哲学専攻修士課程修了、ロンドン大学アジア・アフリカ学研究所に留学。同志社大学、龍谷大学の元非常勤講師。著書に『アウンサンスーチーへの手紙』、『モスクワの女たち』、『乳がんは女たちをつなぐ―京都から世界へ』などがある。大津さんはアウンサンスーチーさんの長年のご友人。この4月にアウンサンスーチーさんが日本政府の招待で来日された時、京都での滞在中はずっとお世話をなさった。これを機会に大津さんにスーチーさんのことを話していただいた。以下はそのお話の要旨である。

アウンサンスーチーとの出会い

私とスーチーとの出会いは、1974年、私がロンドン大学のアジア・アフリカ研究所でチベット語を学んでいた時に始まる。(私は日本では僧侶の免許を持っている。チベット語を勉強して、チベットの尼僧院に入って一生を送ろうと思っていた。)スーチーのご主人はマイクル・アリスさん。彼はチベット語の専門家で、ブータンの若い国王の英語の家庭教師を勤めながら、ブータンの歴史を研究していた。私の指導教授の研究室で、彼は私に、「僕の妻はビルマ人です」と初対面の挨拶をした。その後私の夫がオックスフォード大学に移ったので、オックスフォードに引っ越したが、そこで、同じようにオックスフォードに移っていたマイクルと偶然再開し、1週間後にご夫妻に会うことになった。初めてスーに会った時、彼女はこの世のものとも思われないほど美しく、凛とした感じで、挑戦的な態度で、にこりともしなかったのが印象に残っている。1歳とすこしの男の子がいた。

こうしてマイクル一家とのお付き合いが始まった。スーチーは高校までの教育は国内のミッション・スクールで受けたが、イギリスでの後見人が見つかったので、母親は、彼女をオックスフォードに留学させた。外国、特に英国嫌いの風潮のミャンマーで、なぜ母親が彼女と彼女の兄に英国で教育を受けさせたかについては知る由もない。彼女は大学卒業後、ロンドン大学アジア・アフリカ研究所の研究助手になり、69年から71年までは国連の当時のビルマ人事務総長・ウ・タント博士の下で書記官補として働いたこともある。私が滞在していた74年から76年のあいだ、スーと私は普通の主婦同士のように、普通に付き合った。その当時は英国では東洋人は少なかったから、東洋人と英国人の感情表現の違いに疎外感を感じていた2人が、お互い東洋人ということで、ほっとしたということだったの

だと思う。「東洋人同士だと、何も言わなくても通じ合えるんだな」と思った。どちらも学者の家庭で、貧乏で、境遇も似ていた。特に日本人の場合、当時の英国ではまだまだ敵国人として反日感情をあらわにされる場面が多かった。

国の歴史と国名

ここで少しミャンマーという国について紹介したい。ミャンマー連邦共和国、通称ミャンマーは、東南アジアに位置する共和制国家。1989年までの名称はビルマ。人口は約5千万。多民族国家で、135の少数民族で構成されている。ビルマ族(60%)は国の中央部に、それ以外の少数民族は国の周辺部に住んでいる。皮肉なことに、豊富な資源は全部周辺部にある。公用語はビルマ語。

1044年にビルマ族が中国の南詔あたりから今のミャンマーの中央あたりに侵入してきて、バガン王朝を樹立し、ビルマを統一する。しかし13世紀にモンゴルの侵攻を受け、バガン王朝は滅びる。そのあと、ビルマ歴代王朝は攻防を繰り返しながら、一応は王朝文化を築いてきた。しかし、1600年からインドを植民地として支配し、マレーシア等の他の植民地への食料補給に苦慮したイギリスは、色々な理由でビルマ侵攻を試み、1824－26年の第1次対緬戦争で、ラカイン地区とタニンダーリ地区を占領。1852年の第2次台緬戦争で、下ビルマ一帯を英領に編入して、ラングーンを港湾都市に作り直し、イラワジデルタ地区に、灌漑工事を施し、2毛作、3毛作の出来る米生産基地に変える。上ビルマでは、ビルマ最後の王朝コンバイン王朝のティボー王の時、フランスと通商貿易協定を結ぶが、フランスに接近するのを恐れたイギリスは、1885年に第3次対緬戦争を一方的に仕掛け、王朝を倒し、王一族をインドに追放してビルマを植民地とする。

「ミャンマー」、「ビルマ」という国の呼び名について言えば、「ビルマ」は、やや口語体。「ミャンマー」は、文語体で、すこし範囲が狭い。1989年に軍事政権がミャンマーに改称した。軍事政権の変更を認めないアウンサンスーチーやビルマ連邦国民連合政府のほか、アメリカ合州国、イギリス、オーストラリアなどは「ビルマ」、EUは両方併記、日本、インド、ドイツは「ミャンマー」を使用している。

抵抗運動とアウンサン将軍

1930年代に入り、ビルマのインテリ学生が反イギリスデモを行うようになり、ラングーン大学の学生の頃から、アウンサンは学生運動を組織し、反英の旗手として活躍する。独立を願う青年の代表として、当時の中国共産主義運動に援助を求めるべく、密出国したが、途中で日本軍に捕らえられ、日本に送られる。1942年、アウンサンは30名の同士と日本軍に守られラングーンに上陸し、イギリス軍を駆逐した。それゆえ、アウンサンはビルマの悲願、独立の父だった。その後、独立を約束しながら、ビルマの資源を狙う日本陸軍

は、傀儡政権を打ち立て、ビルマを完全に独立させず、45年の敗戦まで居座った。日本軍の敗色が濃厚と見るや、1944年にアウンサンは同志たちと日本軍への反撃に出て勝利した。2つの帝国主義者から勝利を勝ち取ったことで、英雄となったアウンサンは、1947年に政敵の放った刺客によって暗殺され、独立前に倒れたが、それゆえにこそ、悲劇の英雄として人々が今も崇めるのである。ビルマは1948年にイギリス連邦を離脱してビルマ連邦として独立する。

1985－86年のアウンサンスーチーの京都滞在

1985年にスーは日本学術振興会からお金が出て、日本に来ることになった。京都大学の東南アジア研究センターの横山先生が尽力されて、8歳になる次男を連れて、修学院のInternational Houseに住んだ。父親のアウンサンの資料はたくさんセンターに残っていて、スーはその資料の勉強をしていた。京都がアウンサン将軍に与えた影響に関する彼女の著書も出版されている。彼女自身は、ビルマ人が憎んでいるイギリス人と結婚してイギリスに住んでいるということで、ビルマ人たちが自分のことをどう思っているのか分からない気持ちがあったが、京都に来て、父親の資料を読む内に、アウンサンを知っている多くの日本人や、またビルマの大衆の尊敬の念が今になっても変わらないことを、だんだん真剣に考えるようになった。

86年に彼女が帰国する時、私は彼女に、「あなたはビルマに帰るべきだと思う。今のままだと“お茶の間のヒロイン”にしか過ぎない。帰ってお父さんの意志を継いで、ビルマのために尽くすべきだと思う。」と言ったら、彼女は黙って下を向いたままだった。きっと何か心に響くものがあったのだと思う。

ビルマに帰国後の軟禁状態

1986年に日本から帰国したあと、1988年に母親が脳梗塞で倒れたとの知らせで、彼女はビルマに帰って母親の看病をすることになる。政治的には、選挙が行われるということで、民主化指導者アウンサンスーチーらは国民民主連盟(NLD)を結成するが、彼女は選挙前の1989年に自宅軟禁された。以降、彼女は長期軟禁と解放の繰り返しを経験することになる。しかし軍事主導の政治体制の改革が、新首相のテイン・セインの下で開始され、民主化が一歩一歩と計られるようになる。2008年11月に政府はアウンサンスーチーは軟禁期限を迎えると発表して、13日に軟禁状態が解除される。拘束・軟禁は1989年から計１5回に及んだ。

その間に彼女の夫が1999年に癌のため死去した。彼女は軟禁中で電話もかけられない。軍政府は一時出国を認めたが、彼女の存在が邪魔な政府は、彼女が出国したら最後帰国出来ないようにするのは目に見えていたので、彼女は出国せず、夫の死に目には会えなかっ

た。私は、ほとんど毎年イギリスを訪れて、彼女の2人の子供について色々気をくばり、マイクルの病気の看病をし、死に立会い、お葬式の面倒もみた。

2013年4月の京都訪問

今年の4月、日本政府の招待でアウンサンスーチーは日本にやって来た。京都では、彼女が1985年来日の折に、一家で泊まった私の大津の家に来たいということで、忙しいスケジュールのなか、泊まってもらった。昔マイクルと子供と一緒に来た時の写真があったので、新聞社に渡したら、それが載った。満開の桜の木の側で写真を撮った時は、柔らかな優しい微笑を浮かべていた。嵐山では、私の夫の計画で、小水力発電機の視察を入れてもらった。嵐山の渡月橋のところにある小水力発電機は、あのあたりの夜の街灯の電力を提供していて、残った電気は電力会社に売っている。ミャンマーの農村は80%が電気が来ていない。このような簡略な小水力発電機があれば、すこしでも夜の明かりが提供できるのではないか。 スーはその資料をじっと見ていた。

ミャンマーの問題はあまりにも複雑で、スー一人ではどうにもならないかもしれない。スーの最近の本の題は、Freedom from Fear（恐怖からの解放）である。その中でスーは書いている。――世界人権宣言には、「人は何人も恐怖から自由になる権利がある」と書かれている。何世紀もの圧政の間、ミャンマーの人の心には権力側に対する恐怖が染み付いている。その連鎖を断ち切る政治をすることが、一番大切ではないか。自由になるには、自分に対する責任も自ずから伴ってくる。私が主張する民主主義を分かろうとするための参加が必要である、と。ミャンマーは小乗仏教の国で、国民は、仏陀や偉いお坊さんに帰依して、施しをすることで救われると思っている。しかしこれだけでは十分ではないとスーは言い続けているのである。

しかし今やっと国民はスーの方に向いていると思う。彼女が外国の要人と会えば、いろいろな恩恵がミャンマーにもたらされる。「彼女は、水道の蛇口と一緒。彼女の首をひねれば、外国からジャーとお金が出てくる」という人もいる。しかし、彼女はそれを知った上で、その仕事をしていると思う。彼女はなにより清潔。朝4時に起きて、1時間体操をして、瞑想をする。正しい思想を実行に移す、ガンジーのような人だと思う。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

講演の後、お茶を飲みながら、スーチーさん一家と大津さんご夫妻との交流の歴史がよく分かる貴重な写真をたくさん見せて頂いた。時間の都合で質問が出来なかったのが残念だったが、今話題のアウンサンスーチーさんのお話なので、大津さんのお話の内容は非常に興味深いものがあった。自宅軟禁と言っても、家から出られない時もあったとか。規則正しく、朝4時に起きて、体操、瞑想、という日課を、10年に及ぶ長期間続ける意志の強さには、ただ頭が下がる。憲法の規定では、外国人と結婚している人は大統領に立候補する資格がないとなっているそうだが、最近その憲法条項を変更しようという動きがあるとの新聞記事を読んだ。タイとの国境付近には一大麻薬生産地がある。「政府が麻薬と切れない限り、ビルマに本当の民主主義は来ない」と聞くと、闇がどれだけ深いかが想像できる。そういう問題が、スーチーさんの清潔さと強さで、少しでも良い方に向かわないだろうか、と思う。おそらく次のミャンマーの政治を担うであろうアウンサンスーチーさんの素顔を知る唯一の日本人女性として、大津さんのスーチーさんに対する姉のような愛情にあふれたお話に、皆さんが引き込まれるように聞き入った2時間だった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

講演会終了後、支部長から，京都支部から１２名が参加した本部総会の報告があった。

第2回 大学女性協会定時会員総会の報告

5月19日（日）午前9時30分~11時、名鉄グランドホテルで開催された。名古屋支部長から「1年がかりで総会の準備をした。予想以上の総数143名の参加者を得てうれしい。3日目の研修旅行（伊勢神宮等）には70名余の参加がある」と元気な歓迎挨拶があった。

阿部会長から「新法人化後1年を経過した。公益目的のために今年度も意欲的に取り組んでいきたい。この間、新リーフレットの作成、会のロゴマークのリニューアル化、会報のA4版化、内容も刷新する。HPも充実する。会員拡大に努めたい」旨の挨拶があった。

議事は、議長阿部会長のもと進行し、会計報告、新理事の1名増、新理事1名（神奈川支部 穐田信子氏CIR）選任、賛助会員の改正（会費年一口3,000円）がすべて承認された。報告事項として、平成24年度事業報告．公益目的支出計画実施報告、監査報告、平成25年度事業計画及び予算が報告された。議事は特に質問もなく終了した。

緊急動議として、群馬支部等からJAUW として、維新の会共同代表橋下大阪市長発言に抗議してはどうかの提案があり一同賛成。文案は理事会に委任。本件についてはIFUWにも報告することについても決定。

○総会の後（11：15~12：00過ぎ）、昨年11月、第67回国連総会第3委員会に政府委員として出席された鷲見八重子氏（神奈川支部）から大変充実した内容の報告があった。

○午後は１５委員会の各委員長と２４支部の支部長から現状報告があった。
各支部の共通課題は、会員の減少、高齢化。活動状況は様々。静岡支部は異文化交流事業を継続し県からも助成金が出ている。岡山支部は29回目の外国人弁論大会を開催した。

○事務連絡 ＊東日本大震災被災高校生奨学資金への寄付をお願いする。

＊今年度 全国セミナー10月26日~27日 岡山市、テーマは「男女共同参社会の形成と教育」報告支部を募集中。

＊次年度総会 2014年5月17～18日、会場は東京都市センターホテル

○支部長会 5月18日午後3：00～5：00 出席 各支部長ほか本部役員計36名
各支部会報の情報交換、配布。大分、札幌、群馬、福岡、東京、京都。

○国内NGO委員会（五十嵐委員長）の招集で18日懇親会の後、会合。本部、平野，城倉、丸山、13支部長。
昨年の地方議会女性議員アンケートに続き、今年度は男性議員に実施。その詳細についての打ち合わせ。女性議員アンケート報告は，今秋の全国セミナーで発表。

○近著紹介『クオータ制に実現をめざす』赤松良子監修、WIN WIN編著（パド・ウイメンズ・オフィス）

3.　第２回例会講演要旨　「アジアの留学生を招いてのシンポジウム」

2013年９月２８日

この企画は、支部役員・阪田敦子さんのご提案とお世話で実現した。阪田さんが所属している「カーフ(KAHF)」（Kyoto Association of Host Families、京都ホストファミリー協会）は、1984年に京都大学の数人の教師（創立者の中には、支部会員・西芳子さんとお亡くなりになったご主人も）によって、京都に滞在している留学生の世話をする民間ボランティア団体として設立された。会は2011年に創立25周年を迎えた。この会に参加する留学生は年間70～80名で、設立以来の登録人数は、延べ1,800人、世話をするボランティアは、延べ450ファミリーにのぼるということである。世話をする人は、経済的援助はしないが、家庭での食事に招いたり、本人の行きたい所に連れて行ったり、本人が困っている問題を解決する手伝いをしたり（阪田さんの場合、担当した留学生夫婦の奥さんの妊娠、出産で走り回ったこともあるとのこと）と、それぞれが出来る範囲で精神的なサポートをすることを目的としている。今回お招きした3人もここに登録している留学生である。

出席した留学生：

中国	趙頴（チョウ エイ、愛称：エコさん） 24歳 京都大学薬科研究科　左京区在住
タイ	Sanpakd Piraya（サンパキッジ ピラヤ、愛称：ターンさん） 22歳 京都造形芸術大 情報デザイン科　左京区在住
インドネシア	Andarini Lidwina（アンダリニ リドウィナ、愛称：リリーさん） 23歳 奈良先端科学技術大学院大学 Information Science　左京区在住

シンポジウムは、中川慶子支部長を進行役として、3人それぞれに、何故留学しようと思ったのか、何故京都を選んだのか、京都での生活はどうか、勉強の上で問題はないか、将来の計画は、などをお話していただき、休憩を挟んで、質疑応答、意見交換を行った。

中国の趙さんは四川省の出身。「お母さんは漢方医で、おばあさんに育てられました。高校までは四川省だが、大学は南京市の中国薬科大学を卒業。卒業してから、その上に行こうと思ったが、何も変わらないので、新しいことをしようと思って留学を選びました。新しい所で、新しい人に会って、「見聞を広め」たいと思ったのです。京都を選んだのは、地図を見て、京都の地形が四川に似ていること。また古い街で、文化水準が高いというイメージがありました。東京には1，２回行きましたが、京都の方がスピードが遅く、自分に合っています。2011年9月に来日しましたが、困ったことは、大学院の研究室で、セミナーに出席しても、皆の発表は日本語なので、あまり分からないことです。研究室の人は難しく、雰囲気はきびしい。助けてくれる人もあまりいません。日本人はマナーが良いので、あまり間違いを指摘してくれません。どうやって頑張っていいか、わからないのが一番困ります。しかし研究室の外のイベントにたくさん参加して良い友達がたくさんできたので、良かったです。今、大阪の薬品会社に就職が決まったので、それまでに日本語の勉強にもっと力を入れたいと思っています。」

タイのターンさんはバンコック出身。「日本に来るきっかけは３年前、２か月神戸の近くの塩屋でホームステイをして、神戸の日本語学校で勉強したことです。タイに帰り、日本語の勉強を続け、日本財団から奨学金をもらったので、2011年8月にこの大学に来ました。現在は、情報デザイン学科で、人に情報を伝えるための手段を勉強しています。今2回生。学校では多くのワークショップに出席して、どうしたら情報がうまく伝わるのか、人と人とのコミュニケーションをうまくするには、どのような方法が効果的なのかを考える勉強をしています。とても面白いです。自分が面白いと思う所を探して紹介する「伏見の町歩きコース」を作るという課題が出されたので、伏見稲荷の商店街をインタビューして歩き、歴史的な由来のある所を見つけてガイドブックを作りました。それが京都新聞に紹介され、そのコピーは伏見区役所に置いてくれることになりました。現在は色々な交流会に参加しています。旅行が好きなので、国内は、九州、長野の上高地、などに行きました。特に京都の桜と紅葉の時季が好き。将来は日本に住みたいと思っています。母親は以前に九州大学に留学したことがあり、日本のことをよく知っています。」

インドネシアのリリーさんは今年の4月に来日。「今京大のJapanese Language Programに参加して、日本語を勉強しています。文部省の奨学金をもらって来ました。日本に来ることを選んだのは、私が関心を持っているmedical electronics（医療電子工学）の学科がインドネシアの大学には無いからです。日本は災害時の人命救助のための医療機器では先端を行っている国です。奈良先端科学技術大学院大学から奨学金をもらいますので、2014年4月から2016年までの2年間、医療電子工学学科の修士課程で勉強します。インドネシアでは地震、津波が多く、いつも多数の犠牲者がでるので、地震、津波で怪我をした人を助ける医療機器の勉強をして、卒業後は国に帰り、その様な機器を製造する会社を起こ

したいと思っています。4月から日本語を勉強していますが、日常生活の中のやり取りでは問題はありませんが、自分の気持ちを伝えるのが難しくて困っています。日本は習慣も行動様式もインドネシアとあまり変わらないように思いますが、新しい友人をつくるのが難しいと感じています。自分の両親は海外で働いているので、私は祖父母に育てられました。9月の終わりには奈良に引っ越して、大学の寮に住みます。その寮は1階、3階、5階が男性用、2階、4階、6階が女性用の階で、多くの留学生や日本人学生が住んでいるので、新しい友人ができるのを楽しみにしています。」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

休憩のあと、質疑応答と意見交換があった。その前に、趙さんとリリーさんのそれぞれのホストファミリーの方が付き添っていらっしゃっていたので、一言お願いしたところ、趙さんを引き受けていらっしゃる方が、自分は専業主婦なので、中国では女性は殆どが働いていると聞いているので、趙さんの漢方医のお母さんのこと、また女性一般のことをいろいろ彼女に質問して、自分のほうが勉強させてもらっている、と話されたのが印象的だった。また、リリーさんのホストファミリーはご夫婦でのご出席で、ご主人はインドネシア滞在が長く、インドネシア語がおできになるので、リリーさんとはインドネシア語で話しているとのことで、きっとリリーさんは母国語を聞いてほっとなさるだろうと思った。

最初に、皆さんは兄弟姉妹がいらっしゃるのか、東南アジアではまだ男尊女卑の風習が残っているところが多いと思われるが、娘が外国に留学すると言った時、両親はどのような意見だったのか、という質問が出された。趙さんは、中国の一人っ子政策のため、彼女は一人っ子。母親は、留学に関しては、勧めたい気持ちと中国に残ってほしいという気持ちで複雑だった、とか。また、彼女の就職が決まった時も複雑だった。就職については、趙さん自身もずっと迷っている。就職して、様子を見て、あまり希望にそぐわない時は帰国しようと思っている、とのこと。彼女はボーイフレンドが中国にいて、将来は日本に来ることになっている、とのことだった。ターンさんは、弟がいる。留学に関しては、父親は反対だったが、母親は昔九州大学に留学していたことから賛成で、その意見が通って留学できたとのこと。弟をまず第1にというようなことは無かった、とのこと。リリーさんは姉と弟がいる。両親は弟を連れて外国で働いているので、彼女は姉と2人で、祖父母に育てられた。留学に関しては、両親とも反対はなかった、とのこと。

次に、日本に来て一番困ったこと、一番良かったことは何かと聞かれて、3人とも口を揃えて、困ったこととしては、日本語の難しさをあげていた。京大では留学生に対する語学教育は充実しているように思えるが、その他の大学ではそれほどではなく、皆さん日本語に苦労している様子が良くわかった。登録している留学生に対して、「カーフ」がまと

まった語学教育制度を持っていないのが意外だった。出入りが激しく、それぞれ水準に個人差があるということで難しいのだろうか。一番良かったこととしては、日本の郵便制度がしっかりしていること、電車・バスの時刻が正確で、交通の便が良いことをあげていた。

　お話を聞いて、もちろん色々な差別的な経験をして、いやな思いをしたことも多いと思うが、皆さんそれはあまりおっしゃらず、自分の目的をしっかり持って、お友達をたくさん作って、充実した生活を送っていらっしゃる様子に感銘を受けた。奨学金についても、額は少ないながら、皆さんそれぞれ受け取っていらっしゃるので、最近は留学生を誘致するために奨学金を出している大学が多いという話を聞くが、それは本当なんだなと思った。最後に久保副支部長の挨拶の中に、若い皆さんが日本での経験を母国の将来の役に立ててくださることを希望すると同時に、日本と母国との友好の架け橋となっていただけたら嬉しい、との言葉があったが、東南アジアが色々なところで摩擦をおこしている現在、このような人たちの草の根の気持ちがやがて、問題を解消する一助となることを本当に心から願っている。閉会後、別の国からの留学生を招いて、また今日のような交流の機会を持ちたいと役員全員で話し合った。

4.　第３回例会の報告　「紅葉の美しい京都府立植物園の散策」

2013年１１月２６日

それまでは比較的暖かい日が続いていましたが、その前日25日は寒冷前線の通過で風雨の強い荒れた天気、またそのあとの27日は午後から雨という日に挟まれて、26日当日は、奇跡的に穏やかな晴れの天気に恵まれました。参加者は1６名（うち2名は昼食から参加）で、10時30分に集合し、南口から歩き始めました。入るとそこは花壇のある広場で、いきなり目の前に美しく黄葉したイチョウの大木がそそり立ち、皆感嘆の声をあげて見とれ、早速それを背景に記念写真。広場を北に進むと、そこで道はふた筋に分かれていて、左手の真っ赤に紅葉したモミジ園を楽しみながら、その道を右に行くとその奥に芝生の空間があり、そこに小野蘭山の顕彰碑が建っていました。

小野蘭山は1729(享保14)年に京都の塔之段桜木町で生まれた江戸時代中期の博物学者。京都で博物学（当時は本草学とよばれた）の教育研究に携わり、その業績は海外にも紹介され、シーボルトから日本のリンネとも称えられたということです。日本の自然史研究の創始者が京都に生まれていて、京都の地はその学問の原点であったということを皆始めて知り、江戸時代の京都の学問の水準の高さに改めて感銘を受けました。蘭山の残した膨大な資料が整理されて、4，5年後には陳列室が出来るそうです。

京都府立植物園は1924(大正13)年に日本最初の公立植物園として開園しています。面積24ヘクタールの広大な敷地に約12,000種類、約12万本の植物が植えられている、日本有数の植物園です。日本最大級の「回遊式温室」、「昼夜逆転室（ナイトフラワー・ガーデ

ン）」など、関心をそそるものはたくさんありましたが、今回はモミジの紅葉の美しさの鑑賞を主に散策しました。モミジ、サクラ、イチョウなど500本の木々が色鮮やかに紅葉・黄葉して、その美しさには本当に見とれてしまいました。モミジという木の種類は無く、皆それぞれ、たとえば唐カエデとか、イロハモミジ、山モミジとか、名前がついているのですが、植物園には28種類のモミジ/カエデがあるということでした。日本のモミジ/カエデは一本の木が、真っ赤、橙色、黄色など多様な色に変わりますが、その様な現象は、外国（たとえば、東南アジア、ヨーロッパ）ではあまり観られない、日本独特の美しさだということで、最近は紅葉を観るために多くの外国の観光客が日本に来るということです。

この土地は昔半木（なからぎ）神社のあったところで、現在でも植物園のなかに「半木の森」と呼ばれる、その当時の自然に近い森の残ったところがあり、そこには小さな池があり、その周辺のモミジが格別美しく紅葉していたので、そこでまた集合写真をとりました。そのあと、ゆっくりと色々な種類の山茶花が咲いているところを通り、次に椿園の横を通り、「春はきれいだろうね」と言いながら歩きました。常緑樹ではメタセコイアあり、巨木の杉、楠ありで、植物園ならではのゆったりした空間で多種の植物のそれぞれの美しさを堪能しました。紅葉を見に東福寺や嵐山等の名所に出かけ、人にもまれてくたくたになって帰ってくるより、植物園でゆったり鑑賞するのも賢明なやり方ではないかと思いました。

12時半近くになり、北口から出て10分ほど北に歩いて、昼食をいただく「カポディモンテ」（野菜ソムリエ協会認定京都第１号店）に着きました。イタリアンのお食事は皆さんにおいしいと好評でした。食事のあと、中川支部長さんの岡山でのJAUW全国セミナーの報告、トルコで開催されたIFUW国際会議に出席された廣田輝子さん・松田栄子さんの報告、JAUW国際奨学金をもらって宇治の防災研究所に来ているマレーシアのSitiさんについての阪田敦子さん・竹内佳代さんの報告がありました。また、12月8日(日)のSitiさんとの昼食会のお世話をしてくださっている久保副支部長さんから場所・時間など具体的なお知らせがありました。 会が終わり、万歩計を見た人によると、驚いたことに、1万歩近くも歩いたということでした。良く歩き、美しい自然に感動し、美味しい食事をいただき、心も体も元気を回復した一日でした。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

第３１回IFUW総会ワークショップ報告

３年に一度のIFUW総会が8月16日から21日までトルコのイスタンブールで開催されました。総会には、４９カ国から４００人が参加、JAUWからも２３人が参加されました。以下は、ワークショップで「日本のフェミニスト・カウンセラーの事例紹介」を発表された廣田輝子会員の報告です。

2013年IFUWが設定したワークショップの６つのテーマの中からJAUWが選んだものは「女性のリーダーシップなしで持続可能な未来はあるのか？」でした。本部の国際委員会が中心になって「さまざまな社会において女性がリーダーシップを発揮している際立った事例から学ぶ」というタイトルで広く参加者の募集がありました。

私がこのワークショップに加わった経緯を述べることにします。昨年発表されたGGI（男女間格差指数）において、日本は135ヵ国中101位（2013年度105位）であったことは大へんなショックでした。そんな折IFUW総会のワークショップへのJAUWからの参加を知りました。テーマが現在の日本で最も必要とされている女性リーダーであったこと、そしてGGIが世界6位であったニュージーランドがパートナーであったことも魅力的でした。

事例を持ち寄るという今回の調査方法も幸いして、ワークショップの３人のメンバーが東京と京都と離れていても、ITの使用でグループの意思の統一も資料の交換も簡単にいきました。住んでいる地域の広がりは内容にも広がりを持たせることになったと思います。もっと多くの支部の会員の参加があれば、もっと広い地域の多くの隠れた女性リーダーの成功例を報告することができたのではないかと思っています。

今回のワークショップに参加して学んだことは3つあります。第一は女性リーダーとリーダーシップの問題、第二はワークショップの運営、第三はアンケートの作成とその結果分析です。この３つが私にとって大きな成果であったと考えています。

JAUWがIFUWと連携を深めながら発展して行こうとしている時、会員の皆様も発言する機会を増やしていって欲しいものです。JAUWが関係する国際会議にはIFUWの総会だけでなく、3年毎のIFUWの総会の間に開かれるアジアの大学女性協会総会（AUW）があります。国連の女性の地位委員会の開催にあわせて、NGO/CSWが毎年ニューヨークで開くフォーラムには、国内の国際婦人年連絡協議会に属するJAUWの会員であれば、出席して発表する資格が与えられています。

国際会議に出席するだけでも意義がありますが、発言しなければ結果を生むことはできません。大勢の日本人が出席して発言ゼロではあまりにもみじめで、たしかにGGIが105位

であることを証明していることにもなりかねません。会員の奮起とJAUWの今後の取り組みに期待し、１人でも多くの会員がさまざまな機会に発表の場を持つことを願っています。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

JAUW全国セミナーの報告―男女共同参画社会の形成と教育―

10月26日、岡山市の「ピュアリティまきび」で開かれた全国セミナーには会員９６名、一般１６名が参加、京都支部からも８名が参加しました。開会式の後、IFUWイスタンブール総会、国内NGO委員会及び支部からの報告が行われ，夜には交流会で三船文彰氏のチェロ演奏を楽しみました。NGO委員会の報告は、①女性の参画はなぜ進まないか―全国地方議会女性議員へのアンケート調査報告 ②ジェンダー平等の視点から家庭科教育を考える―アンケートから見る男女平等教育の現状と課題の２点です。①については、JAUW発足以来言い続けてきたテーマであるが、男女共同参画社会がむしろ低下している現状がもどかしい、幼いときからの教育・意識付けが必要、女性議員が結束して国の重要課題として取り組むべきだなどの点が主要な論点でした。②については、現在使用中の家庭科教科書の詳細な調査、家庭科教員の問題意識、家庭科の必修が２単位になり平等教育が後退しているなどの点が発表されました。

翌27日には、大原美術館理事長大原謙一郎氏の講演とパネルディスカッションが行われました。講演のテーマは、「文化の力」を考え直す。国の立ち位置を決めるのは文化であり、その文化は地域の人々（町衆）によって育まれる、というお話しは大変興味深いものでした。パネルディスカッションでは、①岡山大学に於ける男女共同参画への取り組み ②クリエイティブ人材を目指して―「倉敷町衆プロジェクト」の挑戦 ③女性の資質を活かす教育体制について思うこと，について報告されました。

充実したセミナーでした。岡山支部の豊富な人材とネットワークの広さに敬服しました。

5.　京都支部新年会　　2014年１月２５日

最初に中川慶子支部長から新年のご挨拶があった。 そのあと、支部に大きな貢献をなさった高橋千夏会員が昨年１２月１３日に102歳の長寿を全うしてお亡くなりになったことを報告され、皆でご冥福をお祈りして、黙祷を捧げた。

＜故高橋千夏会員の略歴＞

高橋千夏会員は、若くしてご主人を亡くされて、平安女学院短期大学で英語を教えながら3人の娘さんを育て上げ（ご長女は、横浜支部会員で、本部でも活躍なさっている松平節子さん）、その後はさまざまなボランティア活動をなさった。特に京都ルーテル教会の海外ボランティア活動の１つ、バングラデッシュ女性支援の中心的な役割をになって、洪水の被害にあったバングラデッシュを何度も訪れ支援物資をお届けになった。最後に赴かれたのは85歳の時であった。京都支部では支部長として、又長老のお一人として、大きな貢献をなさった。大学女性協会本部においても、さまざまな活動をなさったが、なかでも、それまでは欧米だけに目が向きがちだった大学女性協会の活動に対して、東南アジアの発展途上国との関係をもっと考えるべきだと主張なさり、会の活動に新しい視点を取り入れることに大きな役割をお果たしになった。お耳がご不自由だったこともあって、この2年ほどは殆ど例会にはご出席ではなかったが、新年会や総会などにはお元気で出席なさっていた。去年4月の汎太平洋女性会議の総会では若々しいお姿でご出席になっていたとのことだったので、このご逝去の報は突然であったが、最後までお一人でお暮らしになり、さまざまな活動をなさっていたとのことで、そのご立派な生き方に会員皆は改めて頭の下がる思いである。

そのあと、今回の新年会は趣向をがらっと変えて、龍谷大学3回生で落語研究会のメンバーである深草亭麦々さんの落語を聞いた。題目は、誰でもどこかで聞いたことがあると思われる「子は鎹」。

――遊び人の大工の亭主に愛想をつかして、嫁は8歳の息子と家を出てしまう。後に残された亭主は心を入れ替え、寂しさを愚痴りながらも仕事に励んでいるが、何年かのちに、息子に偶然出会う。

母と２人で貧乏生活をしている息子が鰻の身のほうは食べたことがないと言うので、お小遣いを渡し、一緒に鰻を食べに行く約束をする。息子の様子のおかしいのを怪しんだ母親が、彼を問い詰めて父親と鰻を食べに行く約束を白状させる。両親に再び一緒になってほしい息子は、鰻屋の場所を母親に教え、母親は偶然を装ってそこを通りかかり、昔の亭主と会い、「子が鎹」となって、めでたく元の鞘に納まる、という話である。着物姿で、

亭主と嫁のやりとりを軽妙に語る深草亭麦々さんの語り口は、大学3回生とは思えないほど堂に入ったもので、皆は盛大な拍手を送った。話の初めのまくらでは、自分は老人ホームで落語をすることがあるが、おじいさんはあまり笑わないが、おばあさんはよく笑う、などと言い、聴衆を見て適当な話題を出してくるなど、てなれた様子だった。尊敬する落語家は桂米朝で、出来ればプロの落語家になりたい、とのことだった。頑張って夢をかなえて下さいとエールをお送りして、ご一緒に集合写真を撮った。

　中華料理の食事が始まり、少し量は多かったが、味は良かったと好評だった。国際奨学生のシティさんとは、隣に同じキャリア女性の野口久美子会員が座っていたこともあり、又女性問題におくわしい中川支部長も加わって、女性の結婚、子供、仕事のことなどで話がはずんだ。豚肉は駄目、その他の肉もハラールと呼ばれる特別な方法で処理されていないものは駄目ということで、魚介類、卵、野菜を使って特別のメニューを用意してもらった。彼女はとても美味しいと召し上がっていた。

彼女は今妊娠中で、出産予定日は4月10日前後とのこと。5人の子供がいるが、夫と子供たちは今こちらに来ていて、一緒にマレーシアに帰るということであった。

シティさんは４０歳。クアラランプールのマレー大学を卒業後、ペナンのマレーシア大学で修士号を獲得され、現在、マラ技術大学で講師として物理工学を教えている。（ご主人も同じ大学で電気工学を教える。）京都大学生存圏研究所では、レーダーによる大気の観測技術を習得している。豪雨による大洪水などの被害が多発しているマレーシアで、この技術を降雨の予測に応用して、少しでも国の助けになるような研究がしたいとのことだった。

食事のあと、シティさんに簡単なスピーチをお願いしたところ、――現在、宇治の京都大学生存圏研究所で研修を受けているが、教授を初め皆さんがとても親切にしてくださって、自分の思っていた以上の成果が上がっている。名古屋での国際学会にも連れて行っていただき、また淀川ダム・コントロール・センターや信楽レーダー研究所なども見学できて、充実した研修になっているので、この機会を与えて下さった大学女性協会に感謝している。又、京都支部の皆さんに昨年１２月には宇治でご馳走になり、お正月には阪田さんのお宅の新年会に招待されて他のイスラム教との留学生とお友達になった。また今日はこのように新年会に招いていただいて、常に私に精神的な支援を下さり非常に感謝している、とのことをおっしゃった。

シティさんは小柄で、おとなしいお人柄のようにお見受けするが、インドネシアでの国際会議で山本教授の話を聞いて、教授のところで研修を受けたいと申し出をして、それが受け入れられると、大学女性協会の国際奨学金に応募、それに合格すると、妊娠中にも関わらず、5人の子供と夫を置いて日本にやって来るという、その芯の強さには、ただ驚いてしまう。いつも大洪水の被害に苦しんでいるマレーシアだが、レーダーの性能を良くする以外に、港、道路、その他全般的なインフラの抜本的な整備が必要だろうし、気の遠くなるような困難があると思われるが、彼女の研究が少しでも役に立つことを願わずにいられない。

シティさんの国際奨学生として帰国前にする研究報告は、妊娠の状況から、東京での発表は無理なので、京都支部が協力し、また生存圏研究所の山本教授のご支援を得て、宇治キャンパス内で2月22日に研究報告会をすることになっていたが、新年会席上で彼女から早めに帰国すべきだとの医者の診断がでたとの相談があり、本部と調整して報告会を早めることになった。彼女はパワーポイントの資料は全部用意できている、と発表を楽しみにしている様子だった。〔後日談になりますが、シティさんの帰国がさらに早まり研究報告会は中止になりました。彼女は本部に詳細な研究レポートを提出し、京大の同研究所内で

パワーポイントを使用して発表会をしたとの報告を受けています。〕

　昨年は、台風による大洪水、酷暑、竜巻、大雪による被害など、「今まで経験したことのない」という形容詞を気象庁が公式に使うほどの異常気象が多発した。家が土台から、また大木が根こそぎ濁流に流されていく光景をよくテレビで目にした。京都でも、50年に1度というぐらいの規模で、嵐山の桂川が氾濫して、橋が壊れたり、山崩れによる土砂災害こそなかったものの、川沿いの店やホテルなどが浸水した映像に胸の痛む思いだった。年の初めに際して、今年はそのようなことがないように、おだやかな年になりますようにと祈りながら、皆さんは家路におつきになったことと思う。

6.　第４回例会講演要旨　　「認知症とその予防」

講師：澤田親男医師（北山病院 院長代行）　　2014年３月１５日

澤田先生は、京都府立医科大学の精神科を卒業のあと、平成12年から北山病院の心療内科に勤務し、23年からは院長代行として、主に認知症を専門として、認知症患者の治療にあたっている。

現在急速に人口の高齢化が進む日本では、高齢に伴うさまざまな疾患が問題になっているが、その中でも、やはり癌と認知症とが2つの大きなものといえる。癌は、人口の3分の1がかかるといわれているが、しかし最近は早期発見によって治る可能性のある病気になってきている。それに比べて認知症は、あまりよく分からない病気と思われているのが実情ではないだろうか。認知症の人の数は近年増加の一途をたどっている。この病気は高齢者に現れることが多く、75―79歳では全体の7.1％、80―84歳では14.6％、85歳以上は27.3％が認知症患者である。厚労省研究班の調査によると2012年時点で、65歳以上の高齢者のうち、認知症の人は推計15％で、約462万人に上る。それ以外に、認知症になる可能性のある軽度認知障害の高齢者も約400万人いると推計され、65歳以上の4人に1人が認知症とその“予備軍”となる計算である。この病気の原因は多様で、その治療法もまだ分からないことが多い。従って、それについて正確な知識を持つことが非常に重要になってくる。

認知症とはどのような病気；その原因は

認知症とは、いろいろな原因で脳の細胞が死んでしまったり、働きが悪くなったために様々な障害がおこり、生活上で支障がでている状態を言う。その原因としては次のようなものがある。①アルツハイマー病などに代表される、脳（例えば、記憶をつかさどる海馬）の神経細胞がゆっくりと死んでいく「変性疾患」で、認知症の約半分を占める。②脳梗塞や脳出血によりその箇所の脳神経細胞が死んでしまう「血管性認知症」で、認知症の約4分の１。③その他、水頭症、硬膜下血腫、感染症などが原因のものなどがある（これは治る認知症）。

認知症の症状

認知症の中核症状は外因性精神障害と言える。

中核症状：記憶障害(物忘れがひどくなる)、判断力低下、見当識障害(日時、場所、人が誰か分からなくなる）、言語障害など。

周辺症状には心因性のものも多い。

周辺症状：意欲の低下、不安、不眠、興奮、抑うつ、妄想、徘徊、暴力など。
日常生活能力の低下：食事、トイレなど日常生活の行動が出来なくなる、歩行障害。

加齢による物忘れと認知症とは違う。例えば、お昼に何を食べたかを忘れた場合、加齢の物忘れは、人が言えば思い出すが、認知症の場合は、食事をしたことも忘れてしまって思い出せない。以上のような事柄が頻繁に起こり、おおまかに言えば、自分一人で日常生活が送れない程度から認知症といえる。一般的には、周囲の人がおかしいと思い病院に連れて行き、専門医のテスト、検査などで総合的に判断が下される。自分ひとりで病院に行くこともある。

認知症の治療

認知症は治らない病気とされ、しばしば対症療法しかないと思われているが、実際には根本的な治療が可能な認知症と呼ばれる病症が多くみられるようになっている。それぞれのタイプに合う多くの有効な薬が開発されているので、症状に応じて医師が適切に使い、リハビリなどを行うことで、進行を遅くするとか、現状を維持するとかができるようになってきている。

認知症の予防方法はあるのか？どのような生活をすればいいのか？

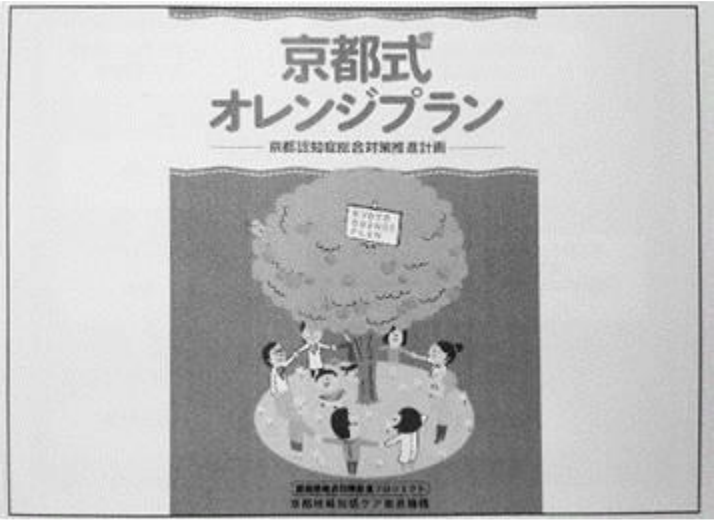
予防できる認知症はある。例えば、血管性認知症は、脳梗塞、糖尿病、高血圧などで発症するのだから、その様な状況を起こす生活習慣、たとえば過度の飲酒、喫煙などを止める努力をする。地中海料理、和食など、魚介類、野菜を多く取る食生活をし、適度な運動、他者との交流、趣味を持った楽しい生活など、良い生活習慣を心がけることで、認知症になりにくくなる。

行政の対応

厚生労働省は、平成24年に厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチームを立ち上げ、今後の国の認知症対策の方向性について検討を開始した。まず提案されたのは、「オレンジプラン」と称するものである。具体的な対応方策は次のとおりである。

１．標準的な認知症ケアパスの作成・普及
２．早期診断・早期対応
３．地域での生活を支える医療サービスの構築
４．地域での生活を支える介護サービスの構築
５．地域での日常生活・家族の支援の強化
６．若年性認知症施策の強化
７．医療・介護サービスを担う人材の育成

京都府は、上記のプランにそって、「京都式オレンジプラン」を立ち上げ、①認知症の専門医を指定し、②認知症サポートリーダーが講座を開き、認知症サポーターを育成し（京都市のサポーターは平成24年3月時点で36,487人で、その人たちは地域の認知症の人たちの支援活動をする）、③(左京区の取り組みとして、)「高齢者にやさしい店」のステッカーを掲示した店は、地域の高齢者をささえ、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりの推進を目指す、などの活動を行っている。



以上、認知症という病気の話と、それを支える地域の問題の話をしました。老年期における適応にはいろいろなタイプがありますが、老年期を積極的に受け入れ、自分に可能な目標を見つけ、それを楽しみながら生活するという「円熟型」の生き方をお勧めしたいと思います。周囲の人は、高齢者に対して、認知症や統合失調症など精神疾患をもっている人も、持っていない人と同様に個性があり、適応のパターンが人それぞれ異なることに留意して、それぞれが自分の人生を受け入れるように援助してほしいと思います。認知症の人も、認知症でない人も、高齢者も、高齢者でない人も、役割意識が必要で、一日一回は誰かに「ありがとう」と言われる人生を送ってほしいものです。ご清聴ありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

認知症というと、脳の機能がだんだんと衰え、人格が破壊され、人が人でなくなっていく悲しさばかりを感じていたので、今日は暗い気持ちで帰っていくのかと思っていたら、澤田先生のとても朗らかで、陽気な語り口のお話を聞いている間に、治る認知症の話もあり、また、薬とリハビリで進行を遅らせることもできるということをきいて、だんだん希望が甦ってきて、明るい気持ちになることができた。また、対応の仕方で、認知症患者の徘徊、暴力などが無くなり、穏やかな生活を取り戻せるという症例のお話は本当にほっとするものだった。

参加者の多くが高齢者だったこともあり、ご自分のこと、友人のことで、切実な質問が多かった。

病院の「物忘れ外来」で検査を受けて、何ともないとの診断をもらってほっとした、とおっしゃった人もいた。しかし先生が、明るい、朗らかな口調でユーモアたっぷりに、しかも的確にお答えになるので、皆さんも明るい気持ちになれたのではないだろうか。質問の時間はずっと笑いにつつまれていた。認知症患者も、この先生が自分を全面的に受け入れてくれていることを本能的に感じて、素直でオープンな気持ちになるのではないかと思った。「初めて体系的に認知症について勉強した」という感想も聞かれ、知ることの大切さをあらためて感じた。いろいろなことが勉強できた2時間だった。